

国立民族学博物館の収蔵品④9

出産する女性たち



写真1 インドの出産の場面を描いた木彫版 (H0092913)



写真2 ブラジルのカラジャの土人形 (H0170126)

出産は、動物に普遍的な生物学的な行為であるとともに、文化や社会に埋め込まれた実践である。民博には、出産の場面を描いたり造形したりした資料がいくつかわりついでに収蔵されている。いずれも出産の真最中、今まさに子どもを産み出さんとする女性の姿を捉えたものである。これらの資料を見ていて気がつくのは、彼女たちがつねに複数の女性に囲まれ、支えられているということだ。そしてもう一つは、女性たちが仁王立ちになったり、座ったり、膝をついたりと思いいい姿勢で出産にのぞんでいるということである。

写真1は、インドのオリッサ州で作られた木彫版で、一九八一年に民博に収蔵されたものである。高貴な女性だろうか、侍女らしき女性二人の肩を抱き、仁王立ちするその股からは、赤ちゃんの顔がのぞいている。次女たち二人も、両手で女性の腰を支え、まさに二人三脚の大仕事である。一方、写真2は、ブラジルのカラジャという民族の土人形で、一九八九年に収蔵されたものである。お腹を抱えて座る女性の前後に女性二人が妊婦の肩と腰を抱いて向き合って座っており、うつむく妊婦の表情は見えないが、彼女を支える二人の存在はなんとも頼もしい。

出産は、次世代の成員が誕生するめでたい出来事だが、同時に、女

性にとって危険を伴う命がけの行為であり、多くの社会ではタブーや禁忌に満ちている。特に、産後の母子の隔離という習慣は、新生児死亡率が高い社会において、生まれたばかりの赤ちゃんを悪霊やスピリットから守るといふ意味合いを持っていた。日本でも、お産は産小屋や産部屋と呼ばれる、母屋から離れた女たちの空間でなされ、母子は産後もそこにとどまり、産婆をはじめとする限られた女性だけが世話をするが多かった。それは、家族、特に男性が産のケガレに触れないようにするということのほかにも、母親と新生児を守るといふ目的もあった。夫が出産に関わることが求められたり、伝統的に夫婦共同出産を行ってきたりした地域もあるが、多くの社会で、出産は産婆や家族などの親しい女性たちによって付き添われつつも、産む本人が主体となっており、自分の力で産むものであった。

ひるがえって、いまでは日本の病院出産率は九八%を超え、五十年ほど前には自宅出産が当たり前だったことすら、想像しづらいようになってきている。民博が所蔵する、出産を描いた収蔵品からは、連続と続いてきたであろう女性たちの営みをうかがい知ることができる。

(松尾瑞穂)